

職人は、もつと映画に描かれてもいいのに

町工場あるといふ、よき居酒屋多し

「町工場と映画?……」と洩る川本三郎さんを、編集部で包囲。無理を承知で話を聞いてみました。すると、ちよつとした作品リストまで作ってくださっていて、感謝感激。でも、やはり作品は少ない。それはなぜなのか……。

作家・評論家

川本三郎

●かわもと・さぶろう 1944年東京都生まれ。文学や映画の評論やエッセイで幅広い執筆活動を展開。『サスペンス映画 ここにあり』(平凡社)、『成瀬巳喜男 映画の面影』(新潮選書)など、著作多数。

町工場の映画は……

——今回の特集が「メイドイン町工場」ということで、川本さんには、ぜひ町工場を舞台にした映画についてお聞きしたいと思ひまして……。はい……。ただ、電話をもらったときに伝えたとおり、町工場を描いた映画についてのまとまった話は、

なかなかできないですよ……。

というのも、いわゆる町工場を描いた日本映画は、ほとんどないんです。それらしき映画としては、鋳物工場が出てくる『キューポラのある街』(日活・一九六二年)や、印刷工場が出てくる『男はつらいよ』(松竹・六九〜九五)なんかが有名ですが、どちらも工場を小さくしたようなものとはいえ、果たしてあれを町工場

といえるのかどうか。

町工場というと、やっぱり職人がいて、機械なり、部品なりを作っているというイメージですよ。ですが、そういったものを題材にした映画は、極めて少ない。一応、戦後の作品で、町工場を描いたものはリストアップしてみんですが(66〜67ページ)。

——この中で、特に印象に残っている



川本さんが、代表的な町工場映画として挙げた『下町の太陽』(監督・山田洋次、1963年公開、写真提供・松竹)。倍賞千恵子と勝呂誉が演じたみずみずしい青春賛歌

るものはありませんか? 作品としてはどれも面白いんです。ただ、町工場がどういった描かれ方で出てくるかは、それぞれですね。『二人だけの橋』(東宝・五八年)と『秘密』(東映・六〇年)は、早乙女勝元さんの小説『美しい橋』が原作なんです。早乙女さんは東京の下町出

身の作家で、若いころには少年工として働いていたので、当時の体験をもとに町工場を舞台にした青春小説を書いていた。昭和三十年代には、それらが原作の映画が、よく作られていました。

山田洋次監督の『下町の太陽』(松竹・六三年)の原案や構成にも協力していて、『男はつらいよ』ができるきっかけの一つも早乙女さんだった。あるとき、下町に詳しい早乙女さんが山田監督を柴又の帝釈天へ連れて行ったところ、気に入って、やがて寅さんの舞台へとつながったのだといいます。

理想主義か社会問題か

——下町のハモニカ工場を舞台にした『明日をつくる少女』(松竹・五八年)も、早乙女さんの小説『ハモニ